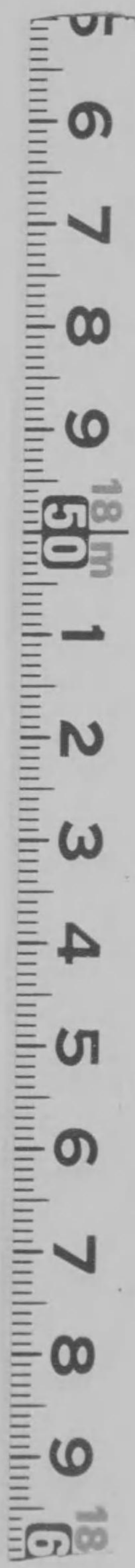


396
248



始



15.8.17

396-248



佐藤藤太著

資本の現在及將來

新社會社發行

大正
10 12 6
内交

讀者諸君へ

この一小篇は、『現代社會病觀』中の一章として、書いたものであり、其名前も『資本現象の現勢』と云ふのでしたが、必要により、これだけを單行本として發行します。

もどく、資本現象の大勢だけを、看取しやうと努めたものであるから、理論上には簡單過ぎて、諸君の論理を満足せしめ得ないところが、多いでせう。それらの個所をば、

文序

文序

おひく／＼別々に詳論しますから、御不満の点をばどうか、前以てごしく／＼指示して下さい。願ひます。

(2)

この文は大正八年の夏、書いたものですから、今日に比べれば、社會の情勢と氣分とに於て、多少異なるところがあります。けれども、大躰に於て別に豫想外のことも起らず、形勢は進むべきやうに進むでゐますから、この文も別に書直しません。

『病觀』はなるたけ學究的に詮索するツモリでしたけれど、

文序

その内のこの一篇だけはチト試験と推測にかたより過ぎました。丁度、化學者が試験管をひねくりまはす如く、想像盤上に形勢をさまざまに、開展させて見ました。併し實勢の變化を推想するには、大躰この方法をとるより、仕方がないのでせう。各國の斷片的實例を引證すれば、一層論旨を強め得るでせうけれど、それさへ畧しました。そして偏に、諸君の強い想像的斷定力に一任します。

資本現象の大勢に關する私の見解は、從來の何主義のそ

(3)

文序

れども異ひます。私の見解は、本文でわかるごほり——資本
本經濟時代、大規模産業時代、供給豊富時代に於ては、則
ち部分的の社會生産時代に於ては、社會が一切經濟の大綱
を管理すべきであつた。その管理をなすに當りての大方針
は、各家計の皆富超越と、人間の運命の積極化とを、其内
容とすべきであつた。然るに社會の家計政策が、殆んど全
然缺如し、『自由競争の放任主義こそ、即ち最上の政策なれ』
とでも、言ふべきものであつたため、資本現象は十九世紀

文序

以來、今日に至るまでの如き、實勢となり、社會は資本の
修羅場となり、その跋扈する資本自身すらまた糜亂し、資
本戦争の埋草となり、下敷となれる人間其物は、塗炭の苦
しみを嘗めさせられた。併しながら、其は資本現象の本來
の面目でなくして、單に其時代に必須不可避な、皆富超越
的の家計政策、皆富超越的な經濟組織原則を實施せなかつ
たための、應報責罰たるに過ぎない。大機械工業時代、即
ち資本經濟時代の眞乎の効能は、遙かに面目を異にし、遙

かに合理的であり、遙かに多幸多望なるべき筈であつた。それゆゑ、其時代の初期に於てか、但しは無管理無政策の結果がよほど顯れた、十九世中頃に於てか、はた又弊毒窮極の崩壞期たる今日に於てすら、右の必須的な皆富超越政策を採用しさへすれば、資本現象は追々正態に復し、大部分の社會的缺陷は救治せられ、資本は人間の奉仕者となり、おまけに人類運命の積極化てふ、絶代の大革命を遂行し得るのである。——と云ふのです。

『皆富超越主義』がどんなものであるかは、『新社會の原理』中にザット述べてあります。それから此小冊子の附録とした『皆富超越的な新社會の骨子』中にも、あらまし書いてあります。それらを併せて讀むで下さい。なほその精しいものは、おひく／＼續々出します。本書其物も畢竟、資本現象に對する、この主義の觀方と見解とを、畧述したものに外なりません。皆富超越主義てふ名前そのものが、既に奇異な感を起さしめるごとく、資本現象や、社會病乃至缺陷や、

文序

組織原理問題や、近世史観やに對する私の見解が、從來の何主義とも異ひますから、その説明は一つづ、漸近的にやるほか、仕方ありません。それでなければ、物が一度に大ガサになつて了ひます。

併し追々纏まつたもの、大部なものも出て來ます。私は莫大な原稿を持ち、更に宏大な腹案をもつてゐます。是れから諸君が飽かれるほど、續々出します。

序に、皆富超越主義そのものに對する、私の立場を述べ

文序

て置きます。私自身は僅かにこの主義の二葉を投出すだけです。いかに大部な著述を出したところで、それは完成品の提供どころか、粗材の一塊に過ぎません。この大事實上の一見解が、一人や二人の力で、完成できる筈はありません。その理論に於ても、手段方法に於ても、私は單に議題を出すに過ぎません。それを考察し、熟慮し、もし何とかなるものならば、其を仕上げるのは諸君の役目です。それゆゑ、私の言出したところをば、諸君の腦中へ引取つて、

文序

自分のものとして、勝手に育上げて下さい。
大正十年十一月
佐藤藤生

目次

目次

Table with multiple columns listing page numbers and chapter titles. The text is very faint and difficult to read, but it appears to be a standard table of contents for a book.

次目

目次

第九節	同上	七二
第八節	今日果して管理甘受か(上)	六〇
第七節	前世紀中葉に管理せば如何	五二
第六節	同上	四七
第五節	初頭に合理的管理を加へなば如何(上)	三〇
第四節	資本の醜悪作用	二〇
第三節	資本の善美作用	一五
第貳節	現象及び觀念の過渡期	一〇
第壹節	慄上れる資本	一

次目

附録

皆富超越的
新社會の骨子

第拾壹節	除害以上更に積極的作用	七九
第拾貳節	不管理の結末	八三
第拾參節	理路尋求後の現勢觀	八六
第拾四節	社會主義的の現勢觀	九八
第拾五節	凡俗の資本觀及び現勢觀	一〇三
第拾六節	資本現象の轉轍機	一〇三
第拾六節	資本及企業の將來	一〇四



資本の現在及將來

佐藤藤太著

第一章 節

標上れる資本

本資るれ上標

ものである。

資本現象の目下の情勢こそ、實に奇怪千萬、變妙至極な

わが日本では、労働者が僅かに覺醒し始めたほか、今なほ資本萬能である。また米國は其の渦巻く黄金を以て、資本的世界征服に熱中するため、暫し暗流を蔽ひ得る。けれども、歐羅巴に於ける資本は、大戦争により其形骸上數量上に大打撃を蒙つたとともに、以前よりの趨勢を急進せしめて、其資質上精神上には一層深刻なる痛手を蒙つた。今や資本は恰も、藏品また犯罪用の兇器の如く睨まれて、慄上つてゐる。

資本家が攻撃せられ、第三階級が被告の地位に置かれると同時に、資本其物まで頗る恐縮してゐる。資本及び企業其物は恐らく、今後とも是認せられるであらうけれど、其の私有私營の特性上に怪疑の大斧を打込まれるや、資本其物が實に生殺されの躰である。イ。ツソ其の社會化が速かに決行せらるれば、結句ラクなれ、今なほ私人の手に残りながら、其の收利力は涸果て、民衆よりは恰も藏品乃至兇器視せられ、ビク／＼と沒收命令を待つ姿は、如何にも憫れ

である。

よし其ほど極端に陥らない國々に於ても、多數者生活の必要上よりしては、ドシ／＼市場を管理し、物價を制定し、若干事業をば社會政策上の立場から、之を國營に移さうとする。一般國民の『生活』乃至『生計』が主位に直り、資本及企業は其意のまゝ伸縮改易せられ、明らかに主従の地位を顛倒した。労働者團躰は春潮の如き偉勢に加ふるに、進退の巧妙を以てし、資本及び其事業の死命を制する。労働時

間は七十幾時間より次第に四十何時間に短縮し、賃銀は一回と昂騰した。労働者の地位は、動物より奴隸に上り、更に臣下に上り、更に従業者に上り、今や賓客若くは協業者に上らんとし、やがて主人たるを要求するであらう。最近まで職工及び店員をコキ使ひ、傭主は恰も飼主の如く君臨し、罐詰中よりは人の指が顯はれ、油差夫を帶革に捲込むの慘事は、さながら事業全盛の表徴たる如く、想はれたる労働者虐待史は、今日ではもはや星界の物語の如き感が

ある。如何に資本の威力の失墜したることよ。

資本の斯かる凋落を見て、社會主義者は明らかに、「社會的生産及び領有の時代が來た。私有私營の消滅はもはや單に時間の問題のみ」と、快心の微笑を浮べる。無産階級の多數は亦之を歓迎する。彼等の過去の努力と辛痛と、不幸とを顧みれば、其快心も亦無理からぬ次第である。之に反し有産階級と資本主義者、及び改良主義者とは之を以て、ベラボウなど憤り、そんな無法が實現してタマるものかと肩

を怒らす。彼等は飽くまで私有私營の永續を信じ、少なくとも其維持のため努力する。

両者の見解に對しては、毫も輕卒な批判を下すべき必要存せず、吾人は單に、實際の資本現象の急變と共に、兩様の資本觀そのものが愈々緊切に對峙抗爭する事と、資本觀てふもの其自身が注意の焦點となつた事と、資本現象が改めて復世人の考究に上つた事とを、看取すれば可い。吾人は信ずる。今後數年間には我日本人の資本觀もよほど變化

し、且つ動搖するであらう、而してモ少し條理の立つたものとなるであらう。今日の樂天富豪と得意階級と、道德家と、律義者とは、やがて激震に襲はれて、色を喪ふであらう。邦人現在の資本觀と所有觀とは、あまり無省察であり、縮羊や豚に相應しいものである。

尤も我國にも中々早合點の男が在る。二三百萬圓の資産の一主人は、『何れ日本でも遠からず私産沒收が來るのだから、丁度其沒收期までに盡きるやう、上手に費つて了ひ

たいものぢア。早過ぎて小兒の教育費に差支ねても困るし、其かと言つて、残つても要らぬものだし……』と述懐して、彼は眞實其費消に取りかゝつてゐる。彼は思想の明敏と意志の鞏固とで聞けた男であるが、凡そ十餘年くらの見當をつけてゐるらしい。露西亞や獨逸の富豪がヤタラ蒔散らす實例の多いことは、豫々聞いたが、我國では蓋し是がレコードであらう。天下の秋を豫報する一葉、之を以ても、資本觀所有觀の漸く動搖し始めたことを知るに足りやう。

第 貳 節

現象及び觀念の過渡期

何れにしても、資本現象と其觀念とが過渡期に差懸つて
ることだけは、争へない事實である。好くも嫌ふも、泣く
も笑ふも、實勢はそれらに頓着せず、ズン／＼轉化する。
如何に轉化するか、何處に歸着するか、誰も知らない。
實は實勢其物、資本其物が自ら之を知らないで、苦悶轉輾

してゐるのである。米國及び日本の資本が急速に、歐洲の其
れの後を追ふて、著しく共產色を帶來るべきことだけは判
然してゐれど、其以後の趨向は依然不明である。蓋し桃色
化した資本は徒らに、一層急激に苦悶轉輾するだけであら
う。其間には段々雪達磨のやう溶失せる——是れ資本は勞
力に次いで、『生ま物』であり、『腐れる物』である故に。
若し不幸にして、新活路の發見及び採用にして餘り後れ
るならば、百年苦心して折角に蓄積建造した資本の大部分

をば、一再の國際戦争と、終期の級闘と萎縮と、共産的少産との幾年間に、破毀消磨して了ふかも知れない。而して僅かに残存すべき機關と、技術及び組織の記憶とを以て、復又新規時直しと出ねばならぬかも知れない。東歐中歐の現況は切々吾人に斯かる推測を促して止まない。其曉に立つて回顧すれば、往年互に白眼を張つて分厘の利を争ふたのは、抑々何のためであつたか。金剛不壞と想はれた、『所有』の境界線は、蜘蛛巢よりも脆く消去つたではないか。境界

線どころか。所有の實質其物が大部分霧散したではないか。父祖は果してこんなツモリで、蓄財上に悪戦苦闘したのであるか。資本のために死力を盡した、科學と法律と、勞力と計畫と、組織と奮闘と、發明と改良と、收得と蓄積と、秩序と運営と、總文明と總人類とは、今はた何の顔色かある、——といひたくなる。

然らば、現在の資本は抑々如何なる状態に在るのであるか。將又如何に成行くのであるか。更に又吾人は之に對し、

如何なる態度をとれば可いのであるか。是等の問題は社會組織問題その物と殆んど同一であり、之に答へるのは丁度、組織問題に答へる次第となる。

今諸君と共に、正當なる資本現勢観を得るため先づ、——資本現象とは果して如何なるものを指すか、其現象中今日までに現はれたるもの果して如何、又今日では其が如何に偏曲せるか、將又更に其能力をよく伸展させたならば、如何なる結果を顯はし得るか、——を調べて見やう。是れやが。

て透徹せる現勢観に達する所以である。

第 三 節

資本の善美作用

今日に於て資本現象と稱すべきものはと——

(一)、資本は有形無形の事業装置と化して、繼續的に某

種の作業、即ち生産若くは用辨に従事する。

(二)、作業の結果たる製品若くは用辨力は、其需要者に對し、大抵効益を與へ得る筈である。

(三)、事業装置は正面に於て、作業的即ち技術的效果を産出すと共に、更に裏面に於て、經濟的效果即ち利潤を擧げて以て、資本自身に報ゐる。

(四)、今日の資本には悉く私人的持主あり、即ち私有制度であつて、其利潤収益は持主即ち資本家の手に歸す

る。此一事は非難を受ける點である。

(五)、既定資本は其關係範圍内に於て、進取的企業的の創建性を有し、既定及び遊離資本は收利目的のため、全然新方面に向つて新事業、創始性を有し、以て人間の作業及び支配利用界、即ち人類の勢力範圍を擴大して行く。

(六)、資本は常に研究、探索、發見、發明、調査、冒險等と相提携して以て、人間の功用界の擴大改善に

骨折つた。即ち資本は文明を促進した。

(七)、資本及び其より生ずる所得は最大の納税力となりて、社會生活の運行と公益事業の進捗とを可能ならしめた。

(八)、事業装置は常に生産品若くは用辨力を以て、世の需要と接觸交渉するにより、社會一帯の生活をして便利且つ容易ならしめた。又此装置の刺戟力誘引力は世間の活動を促した。

資本及び企業(九)、資本及び企業の運行并に組織が、社會の主要なる骨組となつた。

(十)、一般の事業の装置、特に其一部分たる金融機關の制度は、新資本の形成に甚だ便利であつた。

(十一)、現資本が常に新資本の形成を容易ならしめたことは、單に其所有主に對してだけでなく、其事業に關係する勞働者、並に其事業の製品及び用辨力の使用者、即ち一般世人に對しても、若干程度まで

は形成の便宜を興へた。

第四節

資本の醜惡作用

資本に關する右の諸現象は、今日既に實現せる所であり、世人の既に熟知せる處である。而して今日の粗野幼稚な資

本時代に於ては、右等の有効有用なる諸現象と相並んで更に、變態なる不具現象及び有害作用が、多く行はれてゐる。然り世の中は其不具と有害との、あまり多過ぎるに困つてゐる。其重なるものを挙げれば、――

- (一)、資本は僅に少數者の手に集中せられた。其は大資本の優越力即ち吸收力によると稱せられる。
- (二)、右の吸收力乃至併呑力により、従前よりの無産者以外更に、大多數の國民をば無産者たらしめ、以

て國民の最大部分をして、無資本の労働者たらしめた。此一事こそ即ち甚だしく、資本の信用を害した所以のものであり、資本家をして世の怨府たらしめた所以である。

(三)、資本は無産の労働者の收得分中より搾取した。資本の正当な取得分と搾取分との境界は、却々算定しにくいけれど、トニカク強者たる資本家が弱者たる労働者から、搾取したことだけは事實である。

其の搾取の方法は、第一に直接其事業に關係せる労働者の收得分中より搾取り、第二に其製品及び用辨力の需用者たる一般世人から暴利を貪つた。労働問題上では第一の點を特に咎めるけれど、實際上搾取高の大きいこと、手段の猛烈醜陋なことは、第二の方がヒドかつた。

(四)、社會を資本家と無資本者との二階級に横斷して、階級的鬭争の弊害を百出せしめた。

(五)、個々の資本及び事業が營利觀念の先導と、需給關係の調節とにより支配せられる以外、總体に於て之を按配する意識者なく、又之を按配すべき合理的標準も存せず、其のため所謂資本專制と企業界の無政府状態、即ち戰國時代とを出現せしめた。是こそ即ち十九世紀以來最も甚だしく、世を害した所以のものである。

(六)、今日の資本は品物若くは用辨力の産出でふ、第一

作用に於て、其機械及び組織の優秀なる條件上にては、最少限の産出をなしつつある。

(七)、資本の産出せる是等の品物及び用辨力が更に第三者の手に渡りて、彼等に使用せられる段に至りては、其使用方は、極端に拙劣であり、多くの産品は恰も仇敵の如く極度に悪用せられた。使用方處理方の拙劣は、産出方の拙劣に幾十倍するほどであつた。而して此處理使用の拙劣は即ち家計上の

ことであり、閑却せられて病的となつた家計は折角の産出品を斯く暴殄し、以て益々自ら困憊し、併せて社會を困憊せしめた。然も最大多数の階級が、其を爲すのである。最大多数の家計をして斯く拙劣千萬な、否寧ろ自殺的な處理方使用方をなさしめたのは、國家が合理的に之を指導し得なかつたのと、今一つは資本及び企業上に合理的管理を加へ得なかつたのとに由る。

今日の資本主義者も社會主義者も、はた又中間主義者も皆鈍愚にして、富の生産と其分配上とのみに、眼を奪はれてゐるけれど、この使用上の拙劣暴殄こそ、實に現代の最大罪惡であり、最大の社會病であり、最大の禍源である。それは單に經濟生活上の拙劣暴殄たるに止まらずして、實に精神生活上の醜劣潰敗であり、その禍源である。この使用上の拙劣暴殄に比べれば、生産上分配上の拙

劣暴殄はまだ、物の數にも足りない。然もこの使用上の拙劣暴殄其事すら、合理的の政策によれば、見事に、組織的制度的によく、之を救治し、之を一掃し得られたのである。然り、迂遠闇愚な宗教家や道學者や、所謂文化主義者や精神家やが唱ふる如く、先づ個人々々の精神の改造を先決要件とすることなく、經濟上政治上及び社會上の有形組織により、能くこの使用上の拙劣

暴殄を救治し得られたのである。然も其有形な組織や政策やは、毫も中世式封建式の無理解壓制的なものでなく、能く十九世紀以後に相應はしい、合理的民衆的、有望的なものであり得た筈である（此合理的政策の事は別に述べる）。斯うして見れば、今日囂々として紛争せられつゝあるところの、富の生産上分配上の拙劣不公正、及び暴殄に幾十倍する、富の使用上の拙劣暴殄が、

如何に大慘禍大罪惡たるかを知るに足らう。而して此大慘禍大罪惡は即ち、資本主義の生むものである。今日改造期に於ける一切の主義者は、何故此處まで突込まないか。何故此處に開眼せないか。

資本の醜惡作用を観察する上に於ても、その救済策を考究する上に於ても、是非とも使用上の拙劣暴殄を深く注視せねばならない。

(八)、今日の資本は既に收利力が減退した。

(九)、資本は人間を蹂躪した。

(十)、資本が主人となり、人間が従者となつた。

(十一)、極端に世を賣買化し、賣るべからざるものをまで賣らせた。男女關係の如き、一生の事業撰擇の如きものまで、金錢收得のため犠牲に供せしめた。

(十二)、資本の私有が多數者の隸屬状態と奴隸關係とを惹起し、私有其事が又一の惡現象となつた。

(十三)、人間の執業振をば水臭いもの、屈辱的なもの、能率の低いもの、反自我的なもの、殺風景なもの、自殺的なものとなした。事業装置は人に生存を與へて、眞の生活を奪ふた。此現象こそ即ち現代の社會的弊害の最大なものであるから、今人の覺醒なるものも、斯が單に傭主若くは資本階級の殘虐掠奪に對する、理解覺悟のみであるかぎり、其は未だ奥皮一重を残す、不徹底なものたるを免れな

い。今人は奉職制度其物に對して、眼覺めなければならぬ。然らざるかぎり、社會病の根治救済は到底不可能であり、又眞乎に合理的な新社會は出現し得ない。

(十四) 文明國民が、好景氣(寧ろ浮景氣)と恐慌と不景氣との、周歸病に煩はされ、之に翻弄せられてゐる様は、滑稽である。

浮景氣に浮かされて、社會一帯が熱病者の如く浮かれ出すかと思へば、俄に風船玉の破裂したやうに、信用破裂のため事業も人間も撲り倒されて了ふ。そして青菜に鹽の蒼顔期が數年續く。その間に力がたまり、流通の順路が整頓すれば、それか

ら復、例の浮景氣が浮かれ出すのである。

この循環のため、好運にして賢い投機師、即ち所謂實業家は成金となる。この一循環の度ごとに、富豪の増富力は躍進する。そして多數者は投機性を煽られ、投機界に吸込まれて、産を失ふ。この循環のため、最大多數者の世帯は破碎せられ、掠奪は最も強烈に喰込み、生活は脅かされ、健康は破られ、死亡は速められ、兒女は不具偏曲にせら

れる。

この景氣不景氣の循環は、資本の醜惡作用の一つであり、甚だしくその信用を害する所以のものである。

(十五)、資本は所謂産業的帝國主義を産出し、植民地および海外市場の爭奪のため、しばしば國際戰爭を勃發せしめた。その武力戰の破裂せないあひだは、平生常に龐大な武備を装はしめ、以て壓迫的な軍

費と、多數壯丁の徒食と、國民氣風の武張りとを惹起した。殊に今回の世界戰爭を破裂せしめるに至りて、如何に資本的帝國主義の怖るべく、有害多毒なものなるかを証明した。歐洲を荒廢せしめたものは、資本家と之に結托せる軍國主義者とである。

第五節

初頭に合理的な管理を加へなば如何(上)

今日までの未熟拙劣な資本時代に於ては、有効作用善美現象と共に、如上の有害作用醜惡現象を出現したけれど、若し夫れ前の産業革命後間もなく、即ち機械的新經濟の初頭に於て、資本及び企業上に合理的な管理を加へ、且つ家計上に合理的な指導を加へ得たならば、形勢は一變して、十九

世紀の實歴とは全然別種な天地を現出し、諸々の有害作用と醜惡現象とは、殆んど出現を得なかつたであらう。而して此合理的な管理法なるものは、機械的新經濟の資本の眞性質と、家計の要求とから生れるほかないのであり、同時に其資本及び家計の研究にして、合理的且つ徹底的なるならば、必ず發見し得られべきものである。

茲に資本および企業上に合理的な管理を加へるといひ、家計上に合理的な指導を加へるといふのは所詮、——家計をし

て必富超越の方針をとらしめ、且つ一切の資本および企業をば、其家計方針に添ふべきやう、合理的に編成し、さやう運行せしめることに外ならぬ。則ち之を個條がきにするば、――

- 一、各家計の必富の方針。
- 二、各家計の基礎負擔よりの免役の方針。
- 三、右方針に循ふやう、資本および企業の方針化。
- 四、方針化のため、『所有』の革命的進化。

五、方針化のため、『經營』の革命的進化。
 家計と資本及企業とをして、以上の諸方針をとらしめることが、即ち私の言ふ合理的指導ならびに管理である。一言にいへば、皆富超越主義をとらせることである。その方針こそ丁度、機械的生産と交換とが、各家計に注文したところのものであり、随つて、『所有』および『運用』が則とるべき方針であつた。そして其方針こそ丁度、十九世紀以來の社會的諸疾患を、未然に防ぎ得べきものであつた。

今此合理的管理實施の結果をば、前節の醜惡現象の各條に照らして見るに、――

(一)、大小遲速の差こそあれ、各戸とも必ず富進しつゝある。大資本の優越作用は無論存在するけれど、其は主として他の小資本を侵害併呑するために使用せられずして、私有の大資本に適當した、冒險的開拓的事業の方へ差向けられてゐたらう。優越力の方向を斯く轉換せしめることは、合理的管理

法により容易に爲し得られる處である。且つ堅く銘記すべき事は、合理的管理法の下に於ては、大資本は小資本を併呑せずとも、猶能く増大し得ること、殊に多數家計の富進中に於てこそ却つて、一層迅速且つ容易に増大し得ることである。則ち資本自身の増大性即ち收利力は、其搾取作用や侵略作用上に本來の根據を有せずして、其が生産其他の作業上に致す功用効驗により、當然收利し得

るのである。而して會々今日までの變態期中に於て、正用の分外に出で、正當な報酬以外更に他人の收得分をまで、搾取侵略して併收し得たる所以は、家計及び資本上に至當必要な統理の手が加へられず、其間に何等の條理も組織も存せずして、寧ろ搾取侵略を默認獎勵した、傾向あるに由るのである。

則ち資本が少數者の手に集中せられたのは、全然

病的變態であり、相互の侵略的集中は決して、各自致富の正道でも、必須道でもなかつたのである。『多數者中に分散して共に小資本家となるか、但しは多數を赤裸にし、之を少數の手に集中して富豪をつくるか、富の集散状態には右の二途以上に方法ない』と想ふてるのが、抑々根本的な迷想である。富の經濟は左様機械的なものでなくして、有機的なものである。『他が正當に増富する間に於てこそ、

自分も一層迅速且つ容易に増進し得るのである」と云ふのが、富の經濟の真相である。少くも交易經濟の進歩した、商工中心經濟期の正態である。然るに新經濟界の消息に通せず、昔時の機械的經濟眼を以て新相を判斷し、他を掠め他を侵す外に、營利の途なしと想込める、貧相な商工業者及び資本家經濟學者や、致富は即ち全部直ちに搾取である」と頑信せる、貧相な社會主義經濟學者は、實に

機械的新經濟其物に對する没分曉漢であり、其逆賊である。

とにかく大資本をして正用以外の搾取をなさしめ、強食弱肉的の集中を爲さしめたのは即ち、合理的管理の缺如に由るのであり、低能にして貧相な國家政策の罪である。若し産業革命後間もなく、合理的管理が行はれてゐたならば、此變象は起り得なかつたのである。

(三)、上述の如く合理的管理法にして行はれ居たらんには、國民の大部分が無産者たる如き怪象は無論現はれず、反對に各戸とも大小其々富進しつゝあるのである。搾取作用の能く行はれ得るは即ち、家計指導と資本管理とを閑却せる責罰である。

(三)、資本は多數者の收得分中より搾取らずして、自分の働きに相當するだけのものを收得する。『勞働者の肩かぶり』は、家計及び資本の無管理から來るの

であり、購買者から暴利を貪り得るの變象も亦等しく、獨り無管理の状態下に於てのみ、能く行はれ得るのである。

(四)、兩級別は起らず、社會内は一様に資本家のみとなり、そこに存するものは單に大小てふ同種類内の程度の相違だけである。即ち搾取級と被搾取級の對峙抗爭てふ、病的變象の顯はれ得べき筈なく、大小の家計は悉く共進中に致富し得た筈である。

遅速大小等、同方向上に於ける優劣は盛んに起るべけんも、對向抗争は行はれ得たかつたらう。則ち大機械工業の時代に於ては、若し適當な統理さへ行はれて居たならば、富財上に於て大小遅速の『競走的相違』てふ新原則は著しく顯はれて、主農封建時代の『甲増即ち乙減』の相殺的舊原則は、次第に跡を潜め得た筈なのである。然るに新經濟時代に於て猶、王侯の家産的國家てふ舊型と同種類

同精神なる、『甲増即ち乙減』の原則を周行せしめたのは、實に文明人の一大恥辱であり、新生産の趣旨に違反するものであり、時代錯誤も亦甚だしい。

(五)、資本專制、企業亂脈の變態は、無論起り得なかつた。

(六)、今日の資本が最少限の産出をなしつゝあるは主として、其従業者の氣分の揃はぬこと、殊に最多數の従業者が事業其物と精神的に疎隔し、寧ろ心中

之を呪咀するより來るのである。然るに若し新管
理が初から行はれてゐたならば、斯かる自殺的組
合せは初から起らず、全員の協力により、最大限
の産出を擧げ得たであらう。

(七)、一般購買者が産出物を悪用するのは、主として家
計處理法の悪いのであり、若し合理的指導法さへ
行はれば、此悪用はピタリと止まり、且つ悪用の
排除は極めて自然的、且つ容易に行はれ得るので

ある。それゆゑ此指導にして初から行はれて居た
ならば、是等の闇愚なる自殺的使用が一般現象と
して、公行する如き咄々怪事は起らず、産出品は
大に其効力を發揮し得た筈である。

(八)、今日の資本の收利力の減退したのは、一般市場へ
の施肥を怠つたこと、即ち購買者たる一般國民の
資力涵養を怠つたこと、即ち一般家計の衰弱に因
るのである。然るに家計の合理的指導の行はれる

社會に於ては、各家計の健康的肥大中に、新資本の形成と購買力の増進とは、略々並進し得るのである。其故若し初頭から合理的な家計指導が行はれて、各戸とも富進かたく、生計を向上せしめつゝあつたならば、斯かる購買力不進、市場食慾瘦贏の變症は起らず、随つて資本の收利力は減衰せないのでみならず、至極輕微づゝながら其は増進し得た筈である。

第六節

初頭に合理的な管理を加へなば如何(下)

(九)、堅實鞏固なる家計を有する人間をば、資本はよく蹂躪し得ない。合理的指導制度は能く家計をして、然か堅實鞏固たらしめ得る。

(十)、家計及び資本の管理さへ行はれば、人間が主人にして、資本及び事業は其從者たるの、順正關係が

行はれ得る。

(十二)、男女關係をも賣物となさせる如きは、確かに生活基礎を鞏固ならしめないより起る、低道德の所行であつて、合理的な家計政策は斯かる弊害の原因を除去し得べく、又家計策により生活基礎の鞏固となりたる以上は、法令を以て斯かる行爲を嚴禁し得る。更に當代の一大流弊たる、最大多數の男子の娼妓的賣身の執業状態は、今日の文明の最大

恥辱であり、今日の人心不満、能率低下、人格不伸の最大原因であるが、是亦家計指導による生活基礎の確立を以て、見事に之を除去し得る。

(十三)、右の如く家計及び資本の合理的管理により、資本の順正作用のみ顯はれて、變態な病的作用が現はれなかつたならば、資本の私有てふ事は毫も憂ふべきでなく、——唯私有乃至所有の狂的專横を默認し、之を増長させる國家政策の無管理と、其愚

策の背景をなす一般民衆の無知どころは、最も憂ふべきものたる事が明らかとなる。従業關係により、多數者が他人若くは事業の隸屬者となるのは、是れ各家の造資法及び事業管理法の、不備なるに因るのであり、是等は當然、合理的管理法によりて除去せられ得る。

(五三)、合理的の家計指導及び資本管理が行はれさへすれば、各戸各人は基礎的生計に事を缺かず、其方は

永久に安全であるから、今日の如き『乞兒的就職』態度に屈する必要なく、彼は自分の眞底から好む仕事に全心全力を注ぎ、以て人物及び技倆の最上發達を遂げ、能率の最大限度を擧げ得る。此一事の効果だけを以てするも既に、新指導法及び管理法の功績は充分など言ひ得られる。

(十四)、所謂『景氣』が病的に浮沈昂落するのは、その根元に於て、大多數國民の家計が健實正態ならず、殊にその購買力が順正ならず、その購買慾が糜亂せるからである。家計其物の性質がそれである上更に、總躰に於ては、一國の總資本増加率と、その總購買力の増加率とが、並進し得ず、前者が常に後者を追越すからである。

總躰に於て購買力の増進が遅々としてゐるから、

それよりも急速に増進する資本は、どうしても、常に購買慾挑發の手段をとらねばならぬ。年々その手段が猛烈にならねばならぬ。斯くて資本よりも過小な國內の購買力は、商賣人に翻弄せられる玩具となる。

他方に於ては、多數者の購買慾は刺戟挑發せられて、過大となり、然もその實際の購買力はそれと正反對に過小であり、その結果、購買慾はますます

すヒステリックとなる。この病的な購買慾と、羸弱にして糜亂せる購買力とを侵襲するに、偉大なる資本の翻弄力を以てする。そこには是非とも颯風起らざるを得ない。その波動のリズムが即ち景氣の周歸的浮沈である。

然るに合理的の管理が、家計と資本との上に加へられなば、總生産高と資本増加率とが増進するに拘はらず、國內の總購買力も亦等しく増進し、前

者と後者との増進率が略々併行する。随つて、現在の如く、その跛行から生ずるところの、景氣の病的浮沈は消滅する。

(十五)

少數者の大資本が海外に出稼がねばならぬのは、其主因は、國內の購買力が資本の増殖力と並行的に増進し得ないからである。而して國內の購買力の不進は即ち、最大多數者の家計が破壊せられて病態にあるからである。然るに此の家計病は、合

理的な家計政策が夙に豫防し得た筈のものである。故に資本的帝國病と、其から來る尨大な武装と大戦争とは、合理的家計指導政策の怠漫が之を起したのである。

更に資本及び事業の合理的統理が行はれ、家計の合理的指導が行はれてゐたならば、全國民は既に悉く資本家となり、國內の主要なる事業は既に悉く、全國民の主食物基本金の手に歸して居たらう。

から、彼等はもはや自家の事業及び資本と生命とを破壊する如き、國際戦争に反對し、武装競争を阻止したであらう。

それゆゑ、若し合理的の積極政策にして、家計と資本及事業との上に加へられてゐたならば、國內の購買力に比べての、資本過剰は除去せられ、且つ餘裕の大資本はもはや、多數國民の心血と薄縁のものであるから、資本的帝國主義同士の衝突から生ずる、國際戦争の起りやうがない。

第七節

前世紀中葉に管理せば如何

産業革命後間もなく、合理的の家計政策及び資本政策の行はれることは理想的希望であり、若し果して其が行はれてゐたならば、凡百の社會的疾患は初から起らず、今日此頃は人類はもはや、殆んど超人の境に達し得てる位で、至極詭向である。けれど、人事は總てさほど蓬萊的にはゆか

ない。多くは變態がよほど昂進し、弊毒の可なり強く顯はれて、其苦痛に堪へられない處から、初めて救治策を講ずるのが、人事の常例である。然らば其史的凡例により、無管理の弊害の稍強く顯はれたる、前世紀の中葉に於て、即ち日本では明治三十年前後に於て、合理的政策の實施せられたらんことを望むのは、決して無理な註文でない。然るに其すら猶實際には夢想だにせられず、否合理法の發見さへ出來てゐなかつた。

若し假に此凡例通りの中葉に於て、合理的の家計及資本政策が行はれ得たならば、其結果果して如何。之を新經濟の初頭の實施に比すれば、諸弊害が既に昂進してゐるから、前節の如く初より無病健全なる生立をなし得た社會と異なり。何彼につけて障害及び損害が多からうけれど、其代り既に弊害に懲りてゐるから、坊ちやん育ちの前節の社會よりも、堅實眞摯な長所を有する。況して病的ながらも半世紀間には、巨多の資本と數多の事業組織とを具備したか

ら、之を基礎とし材料として以て、合理的管理法を實施するには、非常な便宜がある。殊に合理的管理案の一骨子たる、生計基金の公的運用のためには、其周圍に於て既に多くの私有資本と、私營事業との活動せることを要件とするから、彼是の點を綜合して考へれば、中葉頃の實施が最も當を得たもの、又最も自然的なものであつたらう。則ち半世紀間の損害と苦痛とは甚大であつたけれど、其のため管理の必要を悟り、且つ必須な諸準備を整へ得た故に、之を

ば種族的に必須不可避な犠牲と見る外ない。

中葉の管理實施は大體に於て、第四節に擧げた諸症狀を次第に除去し、第五節の諸正態をば追々出現せしめ得たであらう。今之を列記すれば、――

(一)、一旦赤裸となれる最多數國民は、新たに自分の富を造出す。其以後はもはや被搾取の現象行はれず、各戸とも其々富進する。現在の大資本は適所に置かれて、各戸造資のため好個の動力として、活用

せられる。

(二)、大資本の小資本吸收作用は止み、且つ各人各戸其々の勉強と好境とにより、皆富化し得べき筈である。

(三)、労働者搾取の作用は止み、大資本は自分の貢献に對してのみ報酬を得ることとなる。殊に大資本は主として、外護開拓の藩屏的事業に向はせられる。

(四)、級別は十餘年を期して次第に消滅すべく、階級的

- (四) 利害の衝突をば刈除し得る。
- (五) 資本及び企業は無政府状態を脱出し得べく、其の合理的運行が始まる。
- (六) 資本の産出力は次第に増進し、追々一定の有形的條件上に於ける最大限に達する。
- (七) 製品及び用辨力の悪用は大部分除去せられる。
- (八) 資本の收利力は次第に増進する。
- (九) 資本の人間蹂躪は次第に消滅する。

- (十) 人間と資本との主従関係は次第に正態に戻る。
- (十一) 賣買的就業態度は追々除去せられ得、賣るべからざる全人格若くは節操の賣買もやがて跡を絶つであらう。
- (十二) 資本私有より生ずる隷屬状態と奴隸関係とも消除せられ得る。
- (十三) 現代に最も普通的な就業上の屈辱関係と、其から生ずる幾多の弊害も、合理的の家計指導及び資本

管理により、見事に芟除し得られる。

第八節

今日果して管理甘受か!!! (上)

産業革命の初頭に於ても、又新經濟の弊害の顯著に迫り來た中葉頃に於ても、不幸にして合理的管理は實施せられ

ず、變態經濟は放任のまゝで到頭其自爆期に達し、吾人の社會組織は現に自から崩落しつつある、が併し、終末期なる今日に於て、若し合理的管理を施行したならば、其結果果して如何に成行くであらうか。若し夫れ多數民衆にして眞によく之を受入れ得るならば、管理の効驗は依然規面に顯はれ得、やはり今から直ちに新社會に入り得る。而して其結果は前の諸節に於て見たやうなものが、略々同様に顯はれ得、其相違の點は僅少に過ぎないであらう。

併し實際の趨勢、殊に歐米現在の實力階級たる多數労働者の感情は、もはや極度に昂進してゐるから、一度有産階級を叩落して了はねば、即ち級闘の最後の大決戦に勝つて了はねば、到底満足し得ないであらう。則ち理論及び利害の如何に拘はらず、ムシが納まらず。感情が得心せず、腹が承知せないであらう。而して一度、資本及び企業の純然たる萎靡状態、眞の混沌時代を経由して、豫々憧憬せる共產制度を實驗して見、其が到底自立する能はず、吾人の共

同生活の組織たるに足りない事を體驗した上で、初めて合理的管理制度を要求するに至るであらう。之を今日直ちに實施するに比すれば、其経過や如何にも迂曲であり、其間の痛苦慘害は残酷であるけれども、是とも實地の情勢であるから、何とも致方ない。殊に其破壊力と復讐心の執拗猛烈なるを以て、獨り労働階級を責めるのは、其は責める者の間違である。現に其以前に於て既に半世紀乃至一世紀間、資本家側は搾取掠奪を恣にし、弱者

たりし労働者の健康を破り、家庭を毀ち、兒女を賣らせ、家計を壊して、飽くを知らなかつたではないか。労働者側が窮迫困憊のあまり反噬の臍を堅めるまでは、掠奪と壓迫と、侮辱と殘虐と、蹂躪と翻弄とを、少しも緩めなかつたではないか。永い間の彼等の横暴殘忍に比べれば、今日の労働者の反感と破壊とは、ヨシ如何に猛り狂はうとも、實に些細なものである。對抗久しきに亘り、幾戰鬥の虚々實々の後、幾多の讓歩は行はれたけれど、其は毫も彼等の人

道的觀念や先見の明知で之を爲したのでなく、一から十まで労働階級の團結力と、實際作業上の不便利とに打負けて、澁々之を承知したのではないか。ヨシ資本家をして左様な殘虐と掠奪とに出ねばならぬやう、之を強迫したものは、自由競争制度即ち無管理制度其物であり、決して個々の資本家其人のみを責めべきでなく、罪は寧ろ競争制度其物の方に重からうけれど、——其制度は即ち個々資本家に好都合なものであり、彼等は其間に優勝者とし得意階級と

して、翱翔したところの勝手な天地であり、且つ其間に於て何れの資本家も悉く出来るかぎり搾取に努め、競争制度其物の弊害以上更に、個々の慾念を満足せしめた處の、其制度なのである。故に制度の罪は制度自身之を負ふべく、其内に於ける資本家の罪は資本家其人々が責に任すべく、決して前者を以て後者に代らしめることは出来ない。

資本家にして既に過去に於て斯く極度にまで、其の有利な地位を濫用し、形勢を昂進せしめたのであるならば、風

向一轉後に於て、労働者が破壊と復讐とを極度にまで押進めやうとも、其は五寸の右偏に對する五寸の左偏に過ぎず、そこに何等の無理も存せないではないか、若し今更勞資の協調を唱へ、破壊と復仇の緩和を望むほどならば、彼は何故に其以前の資本家の掠奪追窮時代に於て、當時の強者たる彼等に對し、堂々と掠奪及び輕蔑の緩和を迫り、彼等を必迫する競争制度其物の緩和改善を唱へなかつたか。將又今日に於て勞資の協調を唱へるものは、資本家の過去の掠

奪分即ち彼等現在の資産中の若干部分をば、如何様に處分せうとの成算を有するのであるか。既に過去に於て資本家が労働者を打毆つたのである。茲に打消すべからざる事實、一方に偏した事實と其損害とが存在するのである。然るに其偏倚と傷害と、痛苦と無禮と、侮辱とを其儘不問に附して、有耶無耶に仲直りさせやうとは、仲裁者の没分曉と片手落とも、亦甚だしい。故に勞資の協調を言ふ者は其前に先づ、資本家の謝罪と辨償とを言はねばならない。吾人は

勞資何れにも偏せず、且つ獨特の純粹建設的積極的の立場よりして公平に、『偏曲は先づ資本家側に在り、其被害は未だ謝罪と辨償とを受け居らず、資本家側が充分の理解と反省と悔悟とを以て、公明正大に過去一切を謝罪し、嚴重に之を辨償せざるかぎり、労働者側の報復は正當である』と斷言する。過去の労働者は本能的に以上の條理を直覺し、今の労働者は理智的に之を理解する。故に過現の資本家の双肩に残れる此借金、労働者の胸奥に蟠まれる此鬱憤、――

之を解決せざるかぎり、實勢の疏通解決は到底困難である。70
吾人が合理的管理の甘受を危ぶみ、鬱結せる此感情が一大
暗礁たるを恐れるのは、此故である。

其故實際の進行としては、ヨシ合理的管理案の提出あら
うとも、之を以て大勢を正導するに足らず、資本の没収と
秩序の紊亂とを経て、共産制度の實驗にまで押進むのが、
自然の趨勢である。現に露西亞も匈牙利もソコまで突進し
た。過激的潮先は中歐にも西歐にも、英國にも米國にも、

濠洲にも中央亞細亞にも、乃至支那にまで顯はれようとし
てゐる。支那——知識と生活程度との低く、事大氣質に富
めると同時に、官憲の傳統的横暴に虐げられて、強い無政
府的本能を有し、土匪的經驗が第二の天性となれる支那國
民、殊に中樞機關の薄弱な支那に傳染したなら、過激思想
は又別種の現象を呈するかも知れない。何分に理智よりも
主に感情によりて進退する、過激思想の事であるから、世
界を通じて鬱積せる現制反對、富者反抗、官憲反抗の空氣

が一順發散せられて、氣壓の平均を得るまでは、可なり廣く燃擴がり、燃わ熾るであらう。

第九節

今日果して管理甘受か(下)

實勢が右の如く極左傾に徹底し、資本の沒收を経て共産

制の一樣實驗に押進み、然も其新制度の無骨無經驗なるため、一層混亂と困憊とを甚だしくせうとするに對し、——茲に三つの光明があつて能く之を善導し得ると想はれる。一つは資産階級の淡懷なる謝罪及び辨償であり、第二は露匈等に於ける共産的實驗の辛い經驗であり、今一つは新制度案の引着力と、其が人類の胸中に起すべき強い希望の力とである。資本家階級の淡懷な謝罪及び辨償には、種々な方法があらうけれど、其内最も相應はしくして且つ最も有効

なのは、社會改造のため其資財の幾割かを使用することである。次に露匈等の共産的先進國の經驗は極度に辛痛なものである。恐らく人類史中最深い苦辛の經驗であらう。然も其は將來の希望の甚乏しい、一種の行過ぎに外ならぬのである。其失敗の實情が詳細に周知せられたならば、共産宗の渴仰者たる他國の勞働階級も其憧憬の熱を失ひ、宗教的頑信にヒッが入るであらう。

以上の二者により、被害階級の感情、其破壊熱と復仇心

どの稍緩和せられた處へ、——合理的新社會案が現れ、其の希望に輝く成算と、人口の肺腑に徹する情理併進の實際性と、全然民衆の利益と幸福とを基礎とせる大組織とを以て、各人の努力甲斐ある建設事業に取懸らしめやうとする。是れこそ實に天來の福音である。荒み、怨み、憎み、穢れ、疲れ、而して共産的實驗の失敗の結果、再び深い絶望に陥らんとせる人心は、俄然此大光明に接して、其處に生命を認めて、欣喜雀躍するであらう。彼等は全然新社會案の熱

信者となるであらう。合理的新社會案なるものは、少なくとも是れだけの特徴を有し得、彼等を復活させるだけの大光明を有し得、彼等を小躍りさせるだけの立派な力と情と道理と組織とを有し得ねばならぬ。又吾人が追々に述べべき方案を見られたならば、世人は新社會が必ず其だけの特徴を有し得ること、又之を有し得ることは合理案當然の使命なることを、首旨せられるであらう。吾人は改造の研究者として、合理案が此特長を有し得ることを確信するにより、

茲に斷々乎として労働階級が新合理案を快諾甘受すべきことを確信して、寸毫も疑はず、人類前途の希望洋々たることを信ずる。

破壊期瀕死期に於ても、若し合理案を甘受したならば、其結果は直ちに先づ國民氣象の積極化となりて顯はれ、尋いで全生活及び全社會の積極化すること、前に述べた通りである。或は此のドン底まで打破つた民族の方が、本眞に積極的改造事業に専心し得、其効果が最大なかも知れな

い。舊制の破壊と舊精神の一掃とに徹度した社會の方が、
ヨシ其行過ぎの犠牲と苦痛とは大きいにせよ、極局立派な
新社會を出顯し得るかも知れない。

第十節

除害以上、更に積極的作用

機械的新經濟の初期にせよ、又其弊害の著しく顯はれた
頃にせよ、將また變態時代の終末期たる今日にせよ、若し
幸に合理的の指導及管理にして行はれたならば、諸疾患を
豫防し救治し得ること、上述の如くであるが、——合理的管
理は其等消極的の除害作用以外更に、次の如き積極的諸作

用を現はして来る。――

- (一)、資本は各家計の向上する誘導力となる。
- (二)、資本は各家計の自然収入の資源となる。
- (三)、資本は各家計が新資本を蓄積する土臺兼誘因となる。
- (四)、資本は各家計の必至富進の保障となる。
- (五)、資本は各家計が基礎的生計部分を超越する、主一保証力となる。此超越作用こそ即ち新社會の一特

質にして、全生活の整頓と人間の積極化とを、可能ならしめる土臺であり、資本の効用中恐らく最大なものであらう。

- (六)、資本は共同生活の大案配力兼土臺となる。
- (七)、資本は人間の全生活の向上する好資料となる。則ち文明は今日の如く主として資本内に築かれるに止まらずして、鞏固なる資本上に築かれ得る。
- (八)、資本及び企業の整頓により、人間社會總躰が整頓

せられて、理趣あり活氣あり、向上の必然なる積極的社會と變化する。

(九)、右は即ち國民的の超越及び積極化であり、古來最大の社會革命であり、人類運命の方向轉換である。

(十)、資本の對外國的活動力と其量とは増進するけれども、其の變的必死力即ち侵略力が去勢せられるに
より、國際的衝突の主因を除去し得る。則ち資本管理は國際關係向上の一大動力である。

第拾壹節

不管理の結末

然るに右の如き合理的管理は、新經濟の初期に於ても、又偏傾の弊害の顯著となつた頃にも、將又最近に於てすら猶實行せられなかつた。無管理の結果として、資本及事業も、各人も各家計も、社會全躰も共に苦むだ。斯くて念ふ存分に慕進させられたる、資本專制てふ變態は、其自身の

特質により、今や自然に自潰すべき終末期に達した。中途に於て緩い手綱が時々試みられたけれど、其は單に多少の攪亂を加へたに過ぎず、流れに簀を立てたほどの力もなかつた。斯くて自潰は各方面に始まつた。

(二)、資本專制々度は先づ、勞力の反抗により破滅に瀕した。

(三)、資本自身の收利力が稀弱に陥つた。

(四)、其の愚惡下劣な制度たることが看破せられ、思想

上からも其破毀を希望せられ、且つ企畫せられた。(四)、制度の特質より起る、資本的帝國主義同士の衝突、特に今回の大戦争により、社會全躰を大悲慘境に陥れ、且つ制度自身も終末期を早めた。

(五)、資本及事業の新形式、即ち社會の新組織は有らゆる方面に於て模索せられつゝある。而して其の發見次第、新形式は採用せられ、社會は新形躰下に復活し、且つ急速に進展するであらうが、不幸に

して其は未だ發見せられない。

第拾貳節

理路尋求後の現勢觀

以上の如く大體の理路を其々尋分けた上は、もはや豫言者たらずとも、資本現象の現勢如何をば明瞭に看取し得ら

れる。今斯くして得られた現勢觀を摘記するならば、――

- (一)、資本專制は變則現象であり、社會の無管理から起つたのである。而して新經濟の當初に家計及資本の統理を行ふか、晚くも其弊害の顯著となつた頃に行ふべきは、別文中に述べたる通りであり、管理は特殊なものでなくして、新經濟の必須物であつたのである。

- (二)、如何に容赦して最負目に見ても、資本專制時代は

要するに、企業と技術と、資本と人間とを、或程度まで訓練用意すべき、準備期に過ぎなかつた。其準備期が分外に永過ぎた、め、十九世紀來の社會的疾患と苦惱とは生じた。其の永過ぎた間が資本の變態期である。

(三)、其の無管理の專制時代が永過ぎ、其弊毒が極度に達した、め、終に資本及企業の自爆期に入った。現下が其である。

(四)、斯くて、變則且つ病的な專制時代は珍らしくも、徹頭徹尾無管理放任のまゝ、其終期に達した。

(五)、併し今日に於てすら猶、若し合理的管理を施すならば、病的變態期より漸次正態期に入り得る。

(六)、正態期に於ては、資本は非常に立派な役目を果し、人生に大貢獻をなし得る。

(七)、舊制の既に崩潰に瀕した点から言へば、今日はや手當手後れより來れる、セツバ詰つた過渡期

である。其故過渡期特有の混亂と大動亂と、大不安とに陥つたのである。

(八)、此際係争の熾点となり、多數階級の翹望の標的となれる、『私有私營の沒收』しふことは、自然の條理が示す合理的處理にはあらずして、單に資本家過去の罪惡に對する、感情的責罰的の復仇手段に過ぎない。資本家の謝罪及辨償方法としては、モ少し氣の利いた活用法が、別に存するであらう。

(九)、故に若し假に、現在財産の沒收を敢行するとするも、新時代に於ては合理的新式な私有制度を行ふほかない。其新資産は、無論、合理的の國家管理の下に、各自の新に作るべき筈である。前代の沒收物をは微塵たりとも、之を分與すべきでない。

(十)、目前に色濃く浮かび出た共產制度は、其儘直ちに實行せらるべき新制度ではなくして、國家管理と共營とを強唱し、所有の合理化を暗示すべき使命

を帯べる、一種の理想説に外ならぬ。則ち某種の原理であつて、完成せる制度案ではない。刺戟的加藥であつて、主食物ではない。

(十二)、其故若し、共產主義者の唱へる制度を基礎として、新制度案を作成せうと念へば、之を更に合理化し、之を具躰化し、之を精化せねばならない。併し其は不可能事でなく、現制度を合理化するだけの手數をも要せない。

(十三)、右の点に於て、今日の文明國民の大多數は新制度即ち新社會に對し、非常な見込違をしてゐる。彼等は共產制度を以て直ちに、來るべき新制度だと思込み、之に滿腔の憧憬を注ぎ、新社會實現と資本家征服とを、同時に兼濟し得る絶好制度として、之に宗教的情熱を捧げてゐる。過激運動は即ち此信仰と情熱との表現に外ならぬ。併し共產制は上述の如く、一層の合理化を要すべき粗璞案である。

(十三)、今日では未だ、自然にして合理的な新制度案は發見せられてない。

(十四)、斯くて現勢は既に一方に於て過渡期に入りながら、他方に於て猶新制度即ち正態期に入るべき活路を發見し得ないため、徒らに旋渦し、煩悶自傷して、混亂と苦惱とを重ねつゝある。

(十五)、則ち新活路未發見の點から言へば、變態期既に去つて、正態期未だ開かれず、無見當の過渡期寧ろ

中間期が徒らに永引くから、其間は反動と内争とを繰返すほか、仕方ないのである。

(十六)、尤も形勢が如何に混沌化せうとも、又可なり強い反動が起らうとも、現在の資本本位制度は決して永續し得べきでない。又如何に共產制の實驗に失敗せうとも、現制復舊の懸念はない。歴史は其ほどバカでない。

(十七)、要は、速かに合理的管理案を發見するに在る。

(十五)、資本の合理的管理案は家計の合理的指導案に附屬すべく、資本改造は家計改造の方針に則るべきである。

第拾參節

社會主義的の現勢觀

如上の情勢を會得し得ずして、無管理の變態時代に現はれたる、資本の醜惡作用のみを見て、是れ即ち本來の性質であり、其全性質であると誤信したものであるから、今日の資本觀は大抵間違つてゐる。今其誤れる諸觀念中の左傾派、即ち社會主義的の見解の二三を挙げれば、

(一)、資本の繁殖増大は單に、勞力の過剰作業より生ぜ
る、剩餘價值を搾取ることによりてのみ、能く達
し得られるとの見解。

(二)、資本私有制度内に於ては、大資本の併呑作用は到
底免れ得ない、必至現象であるとの見解。

(三)、資本及び事業の共有化即ち社會化が、必至の趨向
であるとの見解。

(四)、主要なる資本及び事業の共產、即ち共有共營が、

唯一の管理方法であるとの見解。

(五)、今日は正に生産及び所有の社會化の實現すべき時
期に達したのである。歐洲は既に實行各所に顯は
れ、米國及日本の動搖も亦其時機の近きを示すも
のであり、其實現に障害の多いのは即ち、舊利害
と舊思想とが之を妨げるによるとの觀方。

(六)、資本問題はもはやマルクスの判定により、理論上
には半世紀以前既に決審してゐる。其後は其思想

を普及させ、其判定通り實現させ、之を促進したなら可いのであるとの意見。

(七)、右の如く資本問題は既に決審してゐるのであるから、今日はもはや資本問題を云々すべきでなく、之を實現させるため注意と精力とを、労働問題上に集中すれば可いのである。即ち資本問題時代は既に過ぎりて、今日は労働問題時代であるとの意見。

(八)、級闘一点張の見解よりして、最後の決戦を過重

視し、所謂秩序を破壊し運行を停止するほか、他に改造の途なしと過信し、資本家と現在秩序とを憎むのあまり、資本其物及び經濟機關其物の破毀滅盡をまで、是認する如き態度。

(九)、今日の要点は労働問題に在りこの偏見に囚はれて、眞乎の病因及び解決は家計上に存し、家計問題こそ即ち現下第一の急務にして、労働問題及び資本問題は之に従屬せしめて考究し、且つ處理すべき

ものたる事を悟らない僻見。

(十)、資本問題の研究はマールクスにより僅かに端緒を開かれたるに過ぎず、其真相殊に私有上に於ける其積極的効果の最大なるもの、即ち萬戸の超越作用は全然未発見なるに拘はらず、ベルンスタインが僅かに一異例を開きし以外、後輩は資本研究を一層進めやうとはせず、全部決審と速了せし誤。

(十一)、彼等の資本及労働観はナルホド、資本主義の經濟

學者や膏藥張連中即ち改良主義者の所見よりは卓出せりとは言へ、其卓出せることが却つて禍因となり、徒らに資本家の番犬や膏藥張連中を罵倒するここにのみ耽り、數十年間自分等の資本觀及労働觀其物を、更に進歩させやうと爲さなかつたところの、天狗的怠慢。

右の諸見解を批評することは此場合の用向でない故、一切之を差控へ、茲には單に右諸見解に相當すべき吾人の現

勢觀だけを擧げる。

(二)、労働分の搾取作用の行はれたことは紛ふ方ない事實であるけれど、搾取るにあらざれば繁殖致富し得なかつたとの見解は、全然誤つてゐる。寧ろ反對に、搾取らずして、労働者を充分活かせ、彼等にも同じく富進の途をとらせ、資本は自分の正當分だけを取り、以て勞資の眞の一致を得ることが、同一の機械及び組織條件上に於て、最多量の生産

をなし得べき主一要件であつた。随つて又、其方が資本にとり、實歴が最小收利法たりしに反し、最大利益を收め得べき主一要件であつた。又相互の家計同士の關係として見ても、將また資本の營業其物の顧客として見ても、世間一帯が富進しつつあり、其等の多數家計が搾取せられないほど強壯であつた方が、大資本其物にとり一層多くの利益を收め得たのである。

(二)、併呑作用は私有制度内の必至現象でなく、無管理から生ずる一變態に過ぎない。

(三)、資本及び事業の社會化即ち共有化をば、必至の趨向だと言ふけれど、若し實地の趨向だけを見るならば、共有化なるものは畢竟、病的な現在の私有制の崩壊状態を指したに過ぎずして、其は組織でもなく、又キツバリ『共有化』と命名するにすら足りないものであり、單に『私有萎縮』若くば『私營停

止』或は『秩序破壊』即ち『燒跡』と命名する方が、至當なものである。又大躰の趨勢としての社會化を言ふなれば、其は如何にも實際であるけれども、其社會化の内容は寧ろ共營の進捗であつて、決して共有の進捗即ち私有の湮滅ではない。更に又、炯眼で洞察するならば、社會化の眞髓は社會管理に在りて、輕忽拙劣な社會所有ではない。

(四)、次代の合理的管理法は、主要な資本及事業を十把

一束に共有共營するほど、蕪雜無思慮では到底實際制度として、人類が受納し得るものでない。次代の資本及び事業が必ず、管理乃至統理せらるべき事は、殊んど何人も是認する處であるけれど、其管理にはヨホド理趣ある差別を加へなければならぬ。殊に社會主義者及び共產主義者が共有と共營とを大綱みに同一視するなど、トテモ眞面目な管理思想乃至處理方針でない。此兩者は必伴的の

ものでなく、管理の一要点は確に共營にあるけれど、彼等の所信通りの共有は毫も合理的管理上に必要でなく、寧ろ有害である。『共有』てふ事も『私有』と等しく、一層合理化即ち進化せらるべき筈である。

(五)、今日が共產化即ち社會化の時期に達したと言ふことが、現在其儘の私有私營制度が終焉に達したとの意味ならば、吾人も亦『勿論其通り』と同意する。

又現制潰破の結果、一時無私有状態、所有麻痺状態に陥ると言ふ點も、吾人は首肯する。又資本及び事業の無管理時代が終つて、公團の管理時代が來たと言ふのならば、吾人も亦『全く其通り』と賛成する。併し更に一步進むで、共產制即ち共有共營制が今後の所有及生産の組織方針、即ち形式であると云ふならば、吾人は『其は誤である』と斷言する。科學的社會主義者は其立場に相應はしいや

う、社會化の内容をば『社會管理制度』までに、止めて置けば可かつたのである。其より一足飛に共有とか共營とかと、輕忽に内容に穿入り過ぎたから、立場と矛盾した速斷に陥つたのである。方針としての單なる社會管理ならば、大勢の趨向も確に其を指し、實地の必要も亦之を要求するのである。即ち社會化の要點と核心とは、管理に在るのである。而して如何なる管理法が果して大勢の歸

趨であり、實地の必要であるかの点に至りては、別に之を研究すべき筈であつた。又共有化の容易に實現し得られず、故障反對の甚だ多いのは、一半は舊利害と舊思想との反對に因ること勿論であるけれど、一半は共有制其物が粗漏な頭腦から出た粗漏案であるに由る。此事は別文の『行詰れる社會改造』にも述べた處であり、又上來の研究により、公平なる讀者の既に是認せられた處だと思ふ。

(六)、七……十一、是等に對してはモハヤ、一々意見を附すべき必要もあるまい。

第拾四節

凡俗の資本觀及び現勢觀

今日までの資本觀及び現勢觀のうち、最も理義明透なる

社會主義者の見解すら、以上の如く誤つてゐる。況して一般の賸々者流の資本觀に至りては、一として觀念若くは見解と稱するに足るものはない。此事は我日本人に於て特に甚だしい。無省察無理解のまゝなる彼等腦中の雲霧は、單に資本の病的現象の漠然たる映寫其物に過ぎない。『現實御尤』『現状即眞理』との、思想上の被囚状態、即ち没主觀の奴隸状態は、決して之を資本觀若くは見解と稱すべきでない。若し強めて名を探がせば、『闇愚』、『盲目』、『無頭腦』、『豚』、

『蚯蚓』などと、命名すべきである。邦人の大多數は先づ、『資本觀ナンテ、そんな物は何處で賣つてゐますか。其んなことを考へても御上から叱られはしませんか』と、訝り且つ恐れるであらう。賢明なる東亞の盟主よ、誤れる思想政策の怖ろしき結果よ。今彼等腦中の雲霧を假に見解らしく取做して、『闇愚』の見本二三を擧げれば、――

(一)、資本專制の現状は正態であり、大多數無産の資産状態は正當であるとの見解。

- (二)、病的資本制度が終末期に達せることを悟らぬ盲目。
- (三)、金錢を澤山儲けるのが人間の目的であるとの觀念。邦人の九分九厘までの資本觀財產觀といへば、成金にも土方にも、今日猶此以外に何もあるまい。憐れの一等國民よ。
- (四)、貧乏人の澤山なのは人類社會古來の定運であり、何とも詮方ないてふ、前代の殘夢。知らずや、大機械は貧窮現象を絶滅せうとて顯はれたものであ

- る。
- (五)、労働者が搾取られ、踏臺にせられるのは、何とも仕方ない現象であるとの觀念。
- (六)、黄金の前に跪いて、溢れを頂戴するのが當世であるとの、舊い猿智慧。
- (七)、右に反し、ヤタラ金錢に反抗し、資本を罵倒し、之に深く手を觸れないのを、何やら善事の如く感ずる如き、淺薄な馬鹿正直。

(八)、資本が悪性に陥つたとか、生産組織及び社会状態が極悪に達したとかと、理屈を考へるのが即ち馬鹿の骨頂。理屈はごうでも、儲けさへすれば可い。——この短見俗腸。今に見よ、儲けやうにも儲けられず、喰はうにも喰へない時代が来る。其激震時代に先づ踏潰されるものは、斯かる蛆虫ごもであり、且又過渡期改造期を激震期たらしめるものも、亦此種の蛆虫である。記憶せよ、最も闇愚な

國民中に於てこそ、此過渡推移改造の動亂程度と、惨害程度とは激烈なのであり、其實例は現に露西亞が最もよく之を示してゐる事を。

(九)、闇愚政策に瞞されて今日まで毫も、資本現象や生産組織や、社会組織などを考察批判せず、現在の『無頭腦』、『闇愚』をば、人間の通常だと澄まし込むほどの闇愚。

(十)、今ころ成金面や富豪顔をするほどの闇愚。

(十二)、『資本安全』のために過ぎないところの、現在の所謂『秩序』を畏敬する愚習。

(十三)、現在の所有線を絶対なる如く迷信し、其前に拜跪恐縮するの愚感。

(十四)、可なり發達した理知と能力と個性とを有しながら猶、奉職制度の如き全媚的態度に甘んじ得るところの、無感覺と卑怯と沒理想。

(十五)、黄金萬能の弊毒に懲りながら、之をば諸宗教など

の如き破團扇を以て、何とかなし得ると想ふほどの迷信。

(十六)、黄金の洪水に僻易して、隱遁的田園的生活に通れるほどの、不眞面目と淺薄と卑怯。

(十七)、資本現象や家計問題に關する徹底せる研究、明透なる理知によりて、社會病及び改造問題を處理し、歐米に卓越した發見により、歐米に卓越した見事な解決をつけやうとはせずして、徒らに其後塵

を拜するか、甚だしきは日本は特別だなどと頑冥ぶるか、或は思潮を阻止して一時を偷安するの愚策に出づるが如き、粗末千萬な國家政策。

(七)、我日本は未だ分配問題を云々する時代でなく、生産問題資本問題に没頭すべき時代である、即ち分配主義よりも生産主義を先にすべきであるとの愚説。

(六)、社會主義者一流の考に依れば、如何にも労働問題

が第一の急務であるけれども、級闘乃至労働問題一点張では時局は決して、疏通解決せられ得ないことを悟らず、社會病とか時局とか社會改造とか云へば、猫も杓子も忽ち労働問題を昇ぎまはる外、更に他の藝當のない、バカ／＼しさ。彼等は何故に、眞面目に労働問題を研究すると共に、更に資本問題を研究し直さないか。更に両者の出發点兼歸結点となり、両者に裁決と意義と方針とを

與へるところの、家計問題を研究しないか。本統の社會主義ならマダしも、社會主義者の物真似して、徒らに労働問題を神輿扱ひするの輕薄さ。トテモ本氣では視て居られない。如何に當局の闇愚政策が社會問題の研究を禁絶したため、邦人の社會思想の幼稚なるより、斯かる穉態を演ずるのとは云へ、餘り淺薄すぎる。参考のため、殊に眞面目な徹底的研究が如何に必要なかを警告するた

め、次の一事を書添へる。——世界現局の澁滯混亂は唯單に、家計及び資本の合理的管理法即ち合理的新社會案の未發見なため、起つてゐるのである。故に社會主義の好嫌ひや、其豫防や口真似や、俄作りの労働論やなど、其んなものは一切不用であり、——唯單に、マークスが資本の侵畧力即ち搾取作用、即ち消極方面を徹底的に研究した如くに、
——第二のマークスは資本の建設作用、殊に合理

的管理の下に於て、其が萬戸に與へ得る超越作用を發見し、次に此超越作用を完全に實現せしめ得るところの、其合理的管理法如何を精細に尋ね、更に曩に搾取力だと看取した處の某力が、其垢を洗落として見れば、實は絶妙な祝福力であり、人類大躍進の基礎たる、生計超越作用を可能ならしめる力であつたことを悟り、更に又多量生産は果して何事を註文したか、將また此註文に答へべき

『座』は果して何であつたかを知り、以て資本の積極作用を徹底的に研究し、——又第三のマークスは家計其物を同じく徹底的に研究したならば、——此三人の研究により、社會病の真相及び眞因は明瞭となり、其根本的眞救治法は既に發見せられ、社會改造は二三十年以前既に立派に成就せられて、ある筈である。一切の喧嘩も争論も物眞似も其必要なく、必要なのは唯第二第三のマークスの出顯

だけであつたのである。此一事を考へて見ても、稍醒めかけた邦人が潜思研究を忽諸に附し、徒らにお祭騒ぎする事の如何に無益有害なかは知られる。頑冥な目帽政策のため立後れさせられた邦人は、セメテ此度こそは本真劔に社會問題を研究し、本真劔に之を取扱ふべく、又資本現象及び其現勢観に於ても、本真劔に看破する處あらねばならぬ。

以上の諸見解中、之に吾人の所見を附記すべき必要あるものだけには、一口づつ加へて置いたから、其他に對しては別に挨拶する必要もあるまい。一々『闇愚』の相手となつてゐられるほど、時局は緩漫でない。

第拾五節

資本現象の轉轍機

右の如くにして今日の資本観は、左黨も右黨も中央黨も、舉世悉く誤つてゐるから、其現勢觀も亦悉く誤迷に陥るほかない。其觀念及び見解にして既に誤れるから、其から出る實際の行動、對資本問題の取扱振も亦悉く、誤に陥らざるを得ない。随つて又資本及び勞働問題、若くは社會問題の

研究并に運動に對する、所謂取締乃至政策なるもの、方針が誤れるのも、亦無理はない。而して是等一聯の誤迷こそは即ち現在世界の實勢をして行詰らせ、文明人をして拔差ならぬ苦境中に懊惱せしめてゐる主因である。故に今日の要務は、正當にして徹底せる資本観を得、且つ其資本観より來るべき、合理的管理法を發見するにある。今日の實勢上の破産は即ち智識上の破産から來てゐる。

若し夫れ今人の資本観、殊に其現勢觀にして眼醒め、資

本及び事業上に家計中心の合理的管理を下し得るならば、其正態時代は開始せられ、事態は全然一變する。此正態こそは即ち經濟の新組織であり、新社會である。故に資本若くは一般社會の現勢を疏通し、之を新天地に移らしめるとか、但しは社會を改造するとか云ふのは畢竟、資本及び事業上に家計中心の合理的管理を加へることに外ならぬのである。又今日が社會の改造期であると云ふのは所詮、資本が其乳齒期から成齒期に移りつゝ、あると云ふに外ならぬ。

要は一の合理的管理法上に集まり、此合理法は能く澁滯苦惱せる文明世界を進轉せしめ得る。

然らば斯くまで大切なる合理的管理法は果して如何。之を研究し、之を發見することが、今日が行詰れる現勢を疏通進展せしめる所以の、唯一の先決要務である。故に思想、然り此一点上の思想こそは、能く世界を救ひ得るのである。

第拾六節

資本及企業の將來

如上の合理的管理策は早晚必ず發見せられるに相違ない。而して發見の曉、其採用までに幾曲折を経るか。とにかく資本及び企業上に、家計を基礎としての合理的管理の、加へられべき事は疑ない。吾人自身は皆富超越主義こそ、その合理的見解ならびに處理方針であると信ずる。それはと

もあれ、その管理策の發見の曉、残る處は單に時間の問題である。若し幸に合理的管理にして加へられなば、現勢の一變すべき事は、上來觀た通りである。故に以上の觀察を綜合して、資本及び企業の將來を推測すれば、

(一)、合理的管理法の實施と共に、資本の無差別時代、企業の無政府時代は過去りて、資本及び企業の合理的分業時代、合理的多効時代が開かれるのである。

- (二)、今日までの、資本が主にして人間が従たるの時代に代りて、人主資従の時代が顯はれるのである。
- (三)、資本の企業性及び進取性は、新制度内に於て益々發達し、其收利力も亦益々進むべきである。
- (四)、新管理法のもとに資本の私有振は益々進化し、現在の如き泥醉的所有や白痴的私有は、跡を絶つてあらう。
- (五)、各種の資本及び企業は總躰に於て、極めて自然的

- 且つ合理的に統理按配せられて、各々其處を得るであらう。
- (六)、共營主義は益々普及且つ進化する。一方に基礎事業に對する公營主義の本旨を實現遂行すると共に、他方には多數國民の基礎的資源たる小資本をして國營の下に、私營の如何なる大資本にも優る大事業を營ましめ、大活動をなさしめ、大威力を有せしめる。一切事業の合理的統理の下に於てこそ、

共營主義の眞乎の進化は初めて望まれ得べきなのである。

(七)、公營と私營とは並進して、各々其特長を發揮する。

(八)、資本及び事業が以上の如く合理的に配列せられ、各々其分限内に於て其特長を發揮せしめられるに
より、是等は初めて快く人生に對する奉仕をなし得るのである。然り、資本及び事業が眞によく人生に奉仕し、人生を幸福になし得るのは、今後で

ある。

(九)、今後の資本は完全に多數家計の良僕となる。今少し詳言すれば、一切の資本及び事業は悉く、家計中心に整理配置せられ、家計中心に運轉せられる。而して家計は完全に人間向上のため配備且つ運營せられる。

(十)、同じ資本中にも、私營の餘裕の大資本及び其事業は完全に、共營の基礎的集合資本及び其事業の

外護たり、從僕たるの任務を果す。故に九、十兩條の意味を併せて表示すれば左圖の如くなる。



(十二)、資本の産出力は今後頓に増進する。

附録

皆富超越的な

新社會の骨子

第一節

次第にロハ化

私のいふ超越的新社會なるものは、——その成員が悉く、

自分の基礎的の生計負擔から、漸次超越し得る、即ち之をロハとなし得る仕組となし、以て經濟上の懸念をばもはや、吾々の全生活中に於ける副貳的のものとなし、吾々自身は十分に主觀的文化的創造的生活を營み得る、——社會なのです。

基礎負擔を免役超越するには、基金の利子によるのです。その基金は、自他公私總が、りで、名々に之をつくるほかはありません。それは案外容易につくれます。現在の社會

の内においては、所謂貯金は少し有用であり、多くは賽の河原の滑稽事であり、纏まつた積立は至難である。けれども公私他總が、りで、即ち新社會的方針のもとに、超越基金を積立てるのは、有理であるとともに、案外容易です。

この超越的組織といふのは、私の好奇心が発見したのでなく、實は大機械および大仕懸による、大生産と大交換とが、之を指してゐるのである。否、人類の經濟的發達そのものが、之を指してゐるのである。生物の進化は常に、『超越』

を收穫しつゝ、來た。超越の原理は、消極的基底的部分の免役罷脱と、積極的餘裕的新部分の進取、即ち常該生物の積極化にある。

第 貳 節

共產及集産と超越

共產的社會に於ては、人々はもはや生計の心配なく、恰も生計負擔全部を超越し得たやうであるけれど、その代りとして強制労働がある。則ち生計はやはり全部、有料有償なのである。超越的社會に於ける超越なるものは、之と異なり、その基礎的部分だけは、確かにロハとなり得るので

ある。そして基底部から次第に、ロハ化して行かうと、云ふのである。超越的社會の特色は、この基底部からの逐次ロハ化と、それによりて生ずる公私經濟の有趣的整理と、人類の積極化とにある。

共産社會に於てはことさら、基底部からのロハ化などいふ、趣向はないけれど、之を散らして、一帯の生計負擔の軽減がある。即ち五六時間の労働で、生計必需品の配給をうけるには、充分である。——と云へる。併しその放散した

軽減をまとめて、基底部からの逐次超越てふ、大方針によりて進むのが、大經濟力の命令である。大機械および大装置による、大生産と大交換とは畢竟、基底部超越てふことを意味してゐるのであり、その實現を迫るのであり、吾々の經濟の消化部享用部に於ては、之に循ひ、さやうな装置を建造せねば、承知してくれないのである。一口にいへば、超越的社會は、共産的社會に魂と方向とを與へ、之をして一層よく、大機械と大装置との精神に、添はしめるものな

のである。所有慾と所有状態とを、組織的に合理化して、之を新生のものとして復活せしめ、以て共産的の弱勢と少産とを救ふのも、このためである。謂はゆる集産組織も、逐次超越てふ新方針を得て始めて、強い意義あるものとなり得る。

第 三 節

米の生る木と、現在資本の始末

現在の假有的資本は、之を活用して、生計基金即ち眞資本をつくるのに、甚だ調法である。それゆゑ、豫備的資本といふ位の意味に、之を善用したら宜しい。

先づ第一番に主食基金、即ち米の生る木、パンのなる木をつくります。この主食基金は、無論、政府に於て之を管

理し、國內の確實にして有利な事業に、之を投資する。政府はその積立の少しづつ、出來次第、それを以て現在の假有資本に代らせ、現在資本をば追々、他の新事業に移らせませす。即ち新事業を開拓させます。國內各戸がこの主食基金（二戸まへ約二千五百圓）をつくつた曉（約二十年後）には、（農家の主食基本田を除き）その總額が約百五十億圓となる。其だけで、現在の主要な事業（米穀の配給、雜穀類の專賣、紡績、織布、山林、鐵道、汽船、發電、金融、保險、鑛山、生糸、

機械製作、借家、日用品の販賣、その他）を占めて了ひます。かくて共產組織の長所だけは、大抵攝取せられてゐます。そして現在資本はこの主食基金の外護、即ち外皮となりて、専ら開拓的、工夫的、冒險的な事業に當つてゐます。主食基金の利子として、政府は各戸へ白米を配給します。かくて國民は見事に、飯米を超越し得られる。則ち米代は子孫永久に亘りて、ロハとなります。米穀は、その生産者（農家）にとりては猶ほ商品ですけれど、

取扱者(政府)および消費者(一般國民)にとりては、もはや無論商品でありません。その他の普通品もおひく、商品性中の悪い部分を脱却します。

第四節

主食基本田

農家の主食基本田をつくるのも、右の主食基金をつくるのと、ほぼ同一筆法の積立によります。その高は一戸まへは、田地五反で、(畑地は更にひろく)可いでせう。この反別は、一家の稼ぐべき全耕地といふ意味でなく、それ以外に若干の田畑を耕すか、但しは他の兼業をやるべきです。こ

の五反はたゞ單に、之を耕せば、自分の手間賃および入費を引去つて、丁度我家の飯米だけを残してくれる、基本地です。即ち、商人や役人の主食基金と、同一性質のもので

第五節

資本の三種別用途的類別

現在の經濟組織に理趣あらしめるためにも、また新社會に向ふためにも、はた又共產社會から一層合理的、有趣的な組織に進出するためにも、一切の資本をば、左の三種に類別すべき必要があります。その區別の標準は、資本より生ずる利子が、之を收入する家計にとり、如何なる種類の

用途に仕向けられるかの、一點にあるのです。則ち其利子の用途的區別です。

(一)、その利子が主食物代となるか。

(二)、その他の普通生計費となるか。

(三)、但しは、その他の支出若くは積立となるか。

第一種が主食基金(若くは基本田)、第二種が普通生計基金、第三種が餘裕資本です。

一切資本の上に加へる、利子用途的區別こそは、一切の

資本および事業の合理化を可能ならしめる、主一標準です。合理的差別觀念も、また合理的處理も、茲から始まり得るのです。現在の所有權および所有状態と、資本および事業との、無理趣蕪雜なるのも、主としてこの利子用途的差別を欠いでゐるからです。随つて、その救治整理もまた、此一點から始まり得ます。なほ、この用途的類別は、實際にも容易です。

第六節

各種資本の相当取扱

第一種の主食基金に對しては、所有者は單に收益權を行
使し得るだけで、使用權と處分權とは、社會が之を預りま
す。基本田もそのとほりで、農家の手には使用權と收益權
とが、あるばかりです。人が自他の生命を侵す權利を有せ
ないごとく、又生殖現象が先天的運命であり、何人も子孫

の生命を奪ひ得ざるごとく、——第一種資本に對しては、自
他公私とも、之を侵害する權利を有せない筈です。如何な
る債權も公徵權も、之に觸れては可けない。また主食基本
金および基本田には、課税すべきでない。かくて所有状態
と經營組織と、所有と經營との關係と、財政策とは、段落
的に進化する。

假にも資本てふ現象の現はれた以上——そして從業者お
よび顧客より、搾取らない資本現象は、正當なもの、合理

的なもの、また必須的なものである、——その收利作用、即ち不勞收得作用は、先づ之を生命保障上に活用するのが、合理的です。則ち先づ主食物超越作用、主食基金制度を起すのが、至當です。社會には、之を爲すべき義務がありま

す。謂はゆる『經濟の社會化』は、かゝる有趣的方針から始まらねばならない。

第七節

新社會の優越

飯米を免役卒業し得た社會が、第一期の新社會です。この初期なる新社會ですら既に、現在の資本專制社會より段ちがひに卓越せるは勿論、種々に畫かれまた試みられる、共產社會よりも、ギルドの社會よりも、また謂はゆる集産社會よりも、遙かに立派で、幸福で、豊富で、且つ合理的

有趣的であり、おまけに多望です。

第八節

普通生計基金の積立

第一種基金の積立が終了し、全國民が飯米を超越し得たならば、それから第二種資本、即ち普通生計基金の積立に

着手すべき筈です。第二種基金にいたりてはもはや、農家も自有田畑として、之を積立てるに及ばず、他の業者と同じく、普通資本の形式で之を積立てたら、宜しい。そして此第二種資本もやはり、政府が之を管理して、各種事業に投資すべきです。この資本と、それから来る収入とは、課税して宜しい。

全國民がすでに飯米を超越し得た以上、その月々の積立力は大に増加しますから、曩に最微力者にして主食基金を

積立てるため、二十年を要したならば、この度は同じ二十年間に、ほゞ普通生計基金全部(約一萬二千五百圓)を、積立て得る筈です。若し又一とつゞきに、その全部を積立てるのがオツクウなれば、之を分割して、先づ平常着基金、次に住居基金、次に……といふ風に、段々に積立て、宜しい。

第九節

政治の内容の革命

第一種資本で國內の主要な事業を、直接若くは間接に經營することが、政府の仕事の主要なものとなります。現在政府の仕事即ち政治中では、その文化的公益的なものだけが僅か残り、その他の空虚な政治は大抵、廢棄脱落すべき筈です。それが政治の進化であり、革命である。則ち政治